

甲府市を中心に見た 山梨県方言の仮定表現に関する調査研究

——「見ロバ」「出ロバ」などの言い方について——(中)

秋 山 洋 一
本学方言調査会

4 使用パターンとその比較

4-1 山梨県の使用パターン

山梨県方言において、活用語の仮定形に〔-oba 形〕が使われる品詞は、動詞の上一段・下一段・カ変・サ変、及び、形容詞、助動詞の「せる」(使役)・「れる」(受身)・「られる」(可能)・「たい」(希望)・「ない」(否定)であることを前章で確認した。^(註1)

なお、図面には示さなかったが、助動詞の「させる」(使役)でも同様である。また、「らしい」(様態)の仮定形として「～らしければ」が用いられることは皆無に近いが、いわゆる接尾語の「らしい」が付いた形容詞(女らしい等)には当然のことながらこの形が現われる。

ここでは、その「女ラシクロバ」を加えた11種類の語形に対して、インフォーマント個人個人がどのような使用範囲を持っているかという観点から分類し、さらに、やや資料不足ではあるが、他県の場合のそれとの比較によって、山梨県の使用パターンの特色を明らかにしてみたい。

そこでまず、他県の場合をも念頭に置きながら、山梨県65地点のA年代(75才以上)の〔-oba 形〕使用パターンをいくつかに分類してみたのが表4である。

横軸は、上記11種類の語形を活用の種類別に動詞型活用の語形と形容詞型活用の語形とに分け、さらにそれを、自立語の場合と付属語の場合とに分けてある。また、縦軸は、使用範囲の広いほうから狭いものへというのが配列の原則ではあるが、要は、形容詞型活用語から動詞型活用語へ、

さらに、付属語から自立語へという原則の組合せによって型の分類を試みてみたわけである。

なお、調査地点の番号は本紙前号(22号)中の分布地図および調査地点一覧表に使用したものである。

従って、表4のパターンは次のようになる。

A型=動詞型活用と形容詞型活用と両方の語形を併用するもの。

○1・2は形容詞型活用語の使用が完全であるかないかによる分類。

○イ・ロ・ハは動詞型活用語の使用内容による分類。ロは「動詞一種類のみ不使用」の型とする。

○2-イでは、形容詞の使用の完全・不完全でa・bに二分してある。

B型=動詞型活用のみで形容詞型活用の語形は使用しないもの。

○1・2は動詞型活用語の使用が完全であるかないかによる分類。

○イ・ロ・ハはA型に同じ。

C型=動詞型活用語のうち助動詞には使用が見られないもの。

○イ・ロはA型に同じ。

これらの各パターンと調査地点との関係を見てみると次のようなことがわかる。

1) A型は36地点で圧倒的に多く、全体の88%近くがA型を使用していることがわかる。

2) A型の中で、20地点と最も多くを占める1-イ型は、その使用地点が山梨・八代・北巨摩・中巨摩地区に集中している。

3) B型・C型は郡内地方や南巨摩南部に数箇所あるのみで、甲府盆地にはみられない型で

表4 山梨県全体の使用パターン例

語形 型			動詞型活用語		形容詞型活用語		地 域	
			①②③④ ソコ見開 ケ シ ロ ロ ババババ	⑤⑥⑦ 言言出 ワワラ セレレ ロロロ ババババ	⑧⑨ 暑女 ラ ケシ ロケ ババ	⑩⑪ 言言 ワイ ナタ ケケ ロロ ババ	分布地図上の調査地点	
A	1	イ	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇	1, 2, 3, 7, 8, 9, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 23, 24, 25, 27, 30, 31 (国中地方東・西・北部一帯)	
		ロ	〇×〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇	29, 33 (早川町薬袋・早川町新倉)	
	2	イ _a	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇	×〇	4, 5, 26, 32 (三富村上釜口・大泉村谷戸・市川大門町10 (葦崎市穂坂) 宮沢・下部町大欽平)	
		イ _b	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇	××	6, 11 (甲府市上黒平・葦崎市清哲)	
					〇×	××	20 (八代町高家)	
					〇×	〇〇	21 (増穂町久保平)	
ロ	〇×〇〇	〇〇〇	〇×	〇〇	28 (下部町大磯小磯)			
ハ	〇〇〇〇	〇×〇	×〇	〇×	34, 35, 36 (身延町帯金・身延町相又下・南部町上佐野) 42 (丹波山村金風呂)			
B	1		〇〇〇〇	〇〇〇	××	××	52 (河口湖町大石)	
	2	イ	〇×〇〇	〇〇〇	××	××	39 (富沢町東根熊)	
		ロ	〇〇〇〇	〇〇×	××	××	なし	
		ハ	〇××〇	〇〇〇	××	××	56 (勝山村勝山)	
C		イ	〇〇〇〇	×××	××	××	番外 (河口湖町河口)	
		ロ	〇×〇〇	×××	××	××	37 (南部町成島)	

ある。

なお、A-2型は従って、A-1-イ型の使用地域内及びその周辺でのバリエーションと見ることができよう。

4-2 他県との比較

山梨県方言の〔一oba形〕使用パターンの上記のような傾向は、さらに広い使用地域の中にあつてはどのような特色を持つのか、その位置付けについて少々気になるところである。

この点に関しては、県内調査と並行して、特に関東地方域での簡単な調査を、先の『関東地方域方言事象分布地図』(大橋勝男・1976)に導かれながら、筆者個人で行なって来てはいるが、いまだ比較に足る充分な量と密度に達していない。

しかし、いわば中間報告として〔一oba形〕使用が確認できた地点をピックアップして、表4の分類に則して以下に提示してみたいと思う。

いままでに調査した地域は、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県下都合およそ40数地点で

表5 関東地方の一oba形使用パターン

地域 型		関 東 地 方					計
		東京 都	神 奈 川 県	埼 玉 県	千 葉 県	茨 城 県	
A	1-イ	1	3			1	5
	1-ロ		1				1
	2-イ _b				2		2
	2-ハ					1	1
B	1	2	1	1	1	8	13
	2-ロ	1					1
C	イ	3				4	7

ある。年齢はA年代(75才以上)を旨とした。

〔A-1-イ〕型使用地点(5)

東京都青梅市青梅 神奈川県大磯町西小磯
神奈川県秦野市東田原 神奈川県厚木市七沢
茨城県大子町西金

〔A-1-ロ〕型使用地点(1)

神奈川県藤沢市亀井野

〔A-2-イ_b〕型使用地点(2)

千葉県栗源町助沢 千葉県多古町次浦

〔A-2-ハ〕型使用地点（1）

茨城県猿島町踏掛

〔B-1〕型使用地点（13）

神奈川県相模原市下九沢

東京都奥多摩町栃久保 東京都東大和市芋窪

千葉県銚子市猿田町 埼玉県毛呂山町境の入

茨城県大子町西金 茨城県鹿島町宮中

〃 友部町中市原 〃 桂村阿波山

〃 東海村村松 〃 八郷町柿岡

〃 つくば市酒丸 〃 玉造町上宿

（旧豊里町）

〔B-2-ロ〕型使用地点（1）

東京都稲城市矢の口

〔C-1〕型使用地点（7）

東京都奥多摩町栃久保 八王子市上恩方町河井野

八王子市西寺方町大幡

茨城県阿美町新川本郷 茨城県大子町大子

〃 竜ヶ崎市羽原町 〃 美野里町羽島

なお、〔一oba形〕が全く確認できなかった所が全体で10地点ほどある。中でも、逗子市沼間・神奈川県津久井町三ヶ木・横浜市旭区今川・東京都奥多摩町日原・茨城県大宮町八田・茨城県旭村下太田などでは、明治生まれの生え抜き二、三人にあたって、その片鱗すら感じとれなかった（聞いたことも、使った記憶も無い）ということは少々意外に感じた。

以上おおざっぱではあるが、これらを山梨県の場合と比較してみると次のようなことがわかる。

1) A型、即ち、形容詞型活用語にも〔一oba形〕を使用する型は山梨県に限らず関東地方でもその存在が確認される。

2) 地域によって型に多少の偏りがありそうである。

神奈川県はA-1-イを中心にしてA型が比較的多く、この点は山梨県と類似する。それに対して、茨城県はB-1を中心としてB・C型（形容詞型活用語不使用）が多く、山梨県とは反対の傾向を示している。

さらに調査地点を細かくしていけばもう少し多くのことが言えるであろうが、ここで今までに県別につかんだ感触と、管見に入った既発表の報告書とによって上記1・2の補足をしておきたい。

まず、東京都では奥多摩町川野でA型を使う人

がいて、この人はB年代（65才以上）で生え抜きではなかったが、周囲の人達も同じだという証言に従えば、この近辺で他にもA型の証例を得ることができるのではないかと思う。

また、近年発行の『東京都言語地図』（大島一郎他・1986）にはこの種の現象が取り上げられていないのは残念であるが、『国立市史』所収の「国立のことば」（樋渡 登・1988）には「教エロバ」「起キロバ」「為ロバ」「出ラレロバ」などがくだけた日常会話の中で使用される旨の報告がある。形容詞型活用語の記述は無いからあるいはここもB型の可能性が考えられる。また、本書によれば他に町田・狛江・府中・小平各市等でも聞くことができるとある。今後、この種の観点からの調査が待たれる。^(注2)

なお、多摩地区におけるこの種の現象についての報告は、既に、『口語法調査報告書』（国語調査委員会・1906）の東京府国分寺村の記述に見られるから、その歴史は古いものと考えられる。

次に、神奈川県は全体に調査地点が少なかったが、相模川西部の厚木・伊勢原・秦野各市及び中郡一帯を細かく調べればあるいは甲府盆地並みの結果が得られるかもしれない。

なお、『講座方言学』5所収の「神奈川県の方言」（日野資純・1984）等には「コーバ」の記述が見られるが、未だ詳細な報告を知り得ていない。

埼玉県は、『関東地方域方言事象分布地図』に人間地方に「降ラナケロバ」が二地点見られるから、A型が見つかる可能性は充分考えられよう。

茨城県は、中南部の常盤線沿線ではC型が、また、その周辺にB型が存在する。猿島町周辺や山間部で丹念に調べればA型が見付けられるかもしれない。

なお、『茨城県総合郷土研究』（茨城県師範学校・女子師範学校・1939）によると、助動詞を含む動詞型活用語には〔一oba形〕使用が見られるのに対して、同じく助動詞を含む形容詞型活用語には全く使用の記述がないのである。ありがたい事に茨城県の高齢者層の〔一oba形〕使用は、昭和14年の段階でB-1型であったことがこれによって知れるわけである。カ変は本書によると県北部で「キロバ」、県南部で「コーバ」とあり現在でもその通りに行なわれているようである。

大子町西金（明36生・女）と猿島町踏掛（大3

生・男)から得られたA型のものは、それ以前から存在したものなのか、あるいは、それ以後発生したものなのか、大変興味を持たれる所である。

以上、大極的に見ると山梨県を含む関東地方域の西南部の端はA型中心であるのに対して、北東部はB型中心の分布になっているということが言えようかと思う。

5 甲府市における〔一oba形〕使用状況

5-1 分析の方法

郡部と都市部とはおのずから方言の使用状況が異なり、共通語化といった場合都市部の方がより強い傾向を示すのが一般である。その意味では甲府市も例外ではない。従って、以下に示そうとすることも結果的にはその域を出るものではなく、ただいくつかの方法によってその実態を提示することが目的である。

まず第一に、地域差を見るために甲府市を甲府市街地と甲府市郊外とに二分した。詳細については前号(上)の第二章(2-2c)で説明しておいたが、市街地は大凡JR中央線(北部)・身延線(東部・南部)と河川の相川・荒川(西武・南部)とで囲まれた旧市内とし、駅北口商店街の北口・朝日町も加えた。甲府市の中心街である。(巻末に地図添付)一方、甲府市郊外はその周辺地区であるが旧西山梨郡か旧中巨摩郡かのいずれかであった地域に限定した。従って、西武から北部にかけてどちらにも該当しない地域が存在する。

なお、A年代のみ中国地方(甲府盆地)と比較できるようにした。その場合南巨摩郡は除外した。

第二に、年代差を見るために次の五段階に区分した。即ち、A年代(75才以上)・B年代(65才以上)・C年代(55才以上)・D年代(45才以上)・E年代(10代の中学生)である。

当初の計画はD年代以上の中高年層が対象であったが、特にA-D-Eという30年間の差を見ようとして昨年度E年代を新たに加えたものである。人数は各20人とした。(前号2-2b参照)

第三に、保持率と使用率とを観察する。保持率とは10人当たり何人が〔一oba形〕使用を保持しているかであり、使用率とはその他の言い方を含めた仮定表現全体の中でどの程度の割合(重み)で使用されているかである。

第四に、上記の課題それぞれにつき男女差を見る。各年代とも男女それぞれ10人を選んだが、調査の都合で均等にならなかった年代については換算値で示した。

第五に、前章との関連で使用パターンによる比較も行なってみた。

以下、三と五を中心にして他を適宜取り混ぜながら実態の一面を提示することにする。

5-2 使用パターンの比較

前章で山梨県と関東地方との使用パターンによる比較を行なった関係から、本章でもまずこのテーマから取りあげることにする。

表6は甲府市郊外A年代と甲府市街地A~E年代との使用パターンによる比較表である。これは前章で示した表4と対照できるようにしたために、それ以外のパターン例は繁雑になるので「その他」の中で一括してまとめることにした。したがって、「その他」の内容は少なくともそれ以外の

表6 甲府市の使用パターン比較

地 域			郊 外		市 街 地					
年 代 型			高年層		高年層		中年層		若年層	
			A年代		A年代	B年代	C年代	D年代	E年代	
A	1	イ	14	3	2	2			1	
		ロ								
	2	イa	3	2	3					
		イb	3	2	1	2	1		1	
		ロ		3	1				2	
		ハ			1	2			1	
	3(その他)			1	2	1	5		5	
	計		20	11	10	7	6		10	
B	1					1	1			
	2	イ								
		ロ			1	2	1		2	
		ハ			1				2	
	3(その他)			3	4	1	5		3	
	計			3	6	4	7		7	
C		イ		1	2	2				
		ロ			1		1			
	ハ(その他)			5		4	4		2	
	計			6	3	6	5		2	
D	不 使 用				1	3	2		1	

よりは〔一oba形〕使用範囲が狭くなっているわけである。また、中には1、2種類しか使用しない例もあるが、それらも基準に則ってA・B・Cのいずれかに分類しておいた。

これによると、まず第一に、A年代は郊外と市街地とではそのばらつきに大きな差があることがわかる。即ち、郊外は全員がA-2-1型以内に収まっているのに対し、市街地はB・C型（形容詞型活用語不使用）が半数近くに達しているのである。しかもそのうちのほとんど全部が「その他」に属しており、全体で1～3種類しか使用しない人が6人もいる。また、A-1-1型（全種類使用）も14：3と大きな差が出ている。

郊外Aは農業従事者が多いのに対して市街地Aは商業従事者が多いこともこれらのことと大いに関係があらうかと思う。

なお、郊外Aはこれとは別にB-2-1ハの例（会社員）もあったから、作業は大変だがインフォーマントを意識的に選択していけばこれに類似するケースが出てくる可能性は充分ありうる。

ところで、郊外Aと国中Aとの関係はこの使用パターンで見える限りでは大差は無いことが確認できる。なお、この点については本稿2-2c（前号85頁）に記したように昭和61年の調査結果でも認められるところであった。

第二に、市街地を各年代別に比較してみると、A～Dまでの変化はA型が少しずつ減少していることがわかる。一方、B～EではD型（全部不使用）が現われてきている。また、E年代のA型使用が半数もいて親の年代である中年層を上回っていることは全く予想に反した事であった。

しかし、E年代は全体に「その他」が多く、A型「その他」の5人のうち4人は4～5種類しか使っておらず、うち、形容詞型活用語はかろうじて1種類といった内容であるからこれらはむしろB型に近いといえる。B型「その他」の3人も助動詞1種類は使うが全体としては1～3種類であるからこれらもC型かD型に近いと言える。C型「その他」の2人は「コー

バ」1種類だけでまさに崩壊寸前といった様相である。

第三に、崩壊寸前と言え、全体で1～2種類しか使わない人は表7に示したように全体で21人いるが、うち、19人は動詞型活用語に、また、全体の $\frac{2}{3}$ （14人）が動詞に限られている。その動詞のうち「シロバ」「コーバ」は各10人、「見ロバ」は5人、「デロバ」は2人となっており、これで見える限りでは「シロバ」「コーバ」の残存率が高くなっている。

また、D年代がE年代の2倍というのも注目される。

一方、A型に2人いるということは崩壊パターンもそれほど単純ではないということを物語っているようではあるが、いずれにしても、表7の傾向は注目しておきたいと思うのである。

とにかくこの種の例を多く集めることも今後の課題の一つであろう。

表7 崩壊付前の様相（甲府市街地）

年代 型	A 年代	B 年代	C 年代	D 年代	E 年代	計 (人数)	
A型			1	1		2	2
B型				3	2	5	19
C型	4		4	4	2	14	
計	4		5	8	4	21	21

表8 10人当たりの使用人数（保持率）

単位＝人

地 域		国 中	甲 府 市					
			郊外	市 街 地				
語形		年代	A 年代	A 年代	B 年代	C 年代	D 年代	E 年代
動 詞 型 活 用 語	①ソーシロバ	10	10	9	8.5	8	7	6
	②コーバ	10	10	6.5	7.5	7	4.5	6
	③見ロバ	10	10	7	7.5	6	5.5	6.5
	④開ケロバ	10	10	7.5	8	5.5	3.5	6.5
	⑤言ワセロバ	10	10	5	6	5.5	3	5.5
	⑥言ワレロバ	10	10	7	6.5	4.5	5	5.5
	⑦出ラレロバ	10	10	5.5	5.5	4	2.5	4.5
形 容 詞 型 活 用 語	⑧暑ケロバ	9.5	9.5	4	4.5	1.5	1.5	2
	⑨女ラシケロバ	9.5	10	4.5	4	2.5	2.0	3.5
	⑩言ワナケロバ	7.5	9	4	1.5	1.5	0.5	3
	⑪言イタケロバ	9.5	10	3.5	2.5	3	0.5	0.5

表9 10人当たりの使用人数〈男女別〉

単位＝人

地 域		国 中		甲 府 市											
				郊 外		市 街 地									
年代 語形		A		A		A		B		C		D		E	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
動詞型活用語	①	10	10	10	10	8.6	9.2	9.2	7.1	8.5	7.1	8	6	7	5
	②	10	10	10	10	8.6	5.4	7.7	7.1	6.9	7.1	4	5	6	6
	③	10	10	10	10	8.6	6.2	7.7	7.1	6.2	5.7	5	6	7	6
	④	10	10	10	10	8.6	6.9	7.7	8.6	5.4	5.7	3	4	5	8
	⑤	10	10	10	10	8.6	3.1	6.2	5.4	5.4	5.7	4	2	5	6
	⑥	10	10	10	10	8.6	6.2	6.2	7.1	5.4	2.9	5	5	6	5
	⑦	10	10	10	10	7.1	3.8	5.4	5.4	5.4	1.4	3	2	4	5
形容詞型活用語	⑧	9	10	10	9	7.1	2.3	4.6	4.3	2.3	0	1	2	2	2
	⑨	10	9	10	10	8.6	2.3	3.1	5.4	3.8	0	2	2	6	1
	⑩	9	6	10	8	7.1	2.3	1.5	1.4	2.3	0	0	1	2	4
	⑪	9	9	10	10	5.7	2.3	3.8	0	4.6	0	0	1	1	0

5-3 保持率の比較

ここでは各年代でこの〔一oba形〕を10人中何人が使用しているか、つまり、どのくらいの割合で方言形を保持しているかという角度から観察してみようと思う。

さっそく全体の様相を表8によって見てみると、第一に、A年代では国中地方と甲府市郊外とでは前節に続いてここでも大差が無いことが確かめられる。それらに比べ甲府市街地は保持率が悪くなっており、語によっては半分以下の大差となっている。

第二に、市街地を年代別に見るとやはり高年層と中年層とでは差が現われている。E年代は語形①⑪(～シロバ・～タケロバ)を除いてやや上昇している。この点は表6と傾向を同じくしている。

仕事に従事する社会人と就学中の生徒とを同次元で比較するべきではないのかもしれないが、これを素直に見れば例えば動詞型活用語ではE年代の半数以上がこの方言形を使用しているということになるわけである。

第三に、語形ごとに保持率を見てみると、動詞型活用語と形容詞型活用語とではどの年代も後者の方が保持率が低く、特に市街地ではその傾向が顕著である。

また、動詞型活用語では動詞に比べて助動詞の方が低いことが市街地を調べてみるとよくわかるのである。

ところで、これらのことは先に前節で示した表

6に関する第二・第三の傾向と軌を一にしているものと考えられる。

なお、動詞では語形①(ソーシロバ)が最も高い値を示しており、形容詞では旧シク活用語の方がやや高くなっている場合が多い。

以上述べた諸点については、これを男女別に見ても同様のことが言える。

表9はそれぞれの男女差を示したものであるが、全体の流れとしては大きな差と言えるような傾向は認められない。しかし、部分的に見るとA年代とC年代はやや女性の方が低くなっている所が多くなっている。特に動詞型活用語の語形⑤～⑦及び形容詞型活用語の⑧～⑪が顕著で、中でも後者はC年代女では使用者0というのが目に付く。

なお、当然のことながらこの数値はインフォーマントが変われば多少の異同が出てくることは言うまでもないことである。

5-4 使用率の比較

a 方法

ここでは〔一oba形〕使用の位置付けの一つとして、仮定表現全体の中では一体どのくらいの割合でこれが使用されるのかといった観点からまとめてみたいと思う。

一口に仮定表現といってもその言い方はさまざまであるが、ここでは語形の面からおおざっぱに次の四種類に分類することにする。

- a 型 = ～oba 形
 b 型 = ～リャー・～キヤー形
 c 型 = ～レバ形
 d 型 = その他

具体例を混じえた各型の説明を重点的にして置くのと次のごとくである。

a 型は上記の通りである。

b 型は「見リャー」「開ケリャー」等の形が中心であるが、形容詞型活用語では「暑ケリャー」等の形の他に「暑キヤー」の形もここに含めた。なお、サ変は「～スリャー」と「～シリャー」の二形があり、また、形容詞の「暑イケリャー」とか助動詞「ない」では「～ネーケリャー」「～ネーキヤー」の他にやや系統を異にする「～ンケリャー」「～ンキヤー」なども含まれる。

c 型は全体的に共通語形と同じであるが、サ変には「～スレバ」と「～シレバ」の二形があり、カ変は通常の「クレバ」の他に「キレバ」も 1 例（国中 A 年代）ある。

d 型はそれらに所属しないその他の言い方全てということになるが、全語形に共通の「～タラ（バ）」や形容詞型活用語によく出る「～カー」（暑カー）とか「～では」からの「～ジャー」（暑イジャー）といった所が主なものである。また、助動詞「ない」には「～ネー（バ）」「～ナイ（バ）」「～ナクチャー」などもここに含めておいた。助動詞「られる」では可能動詞化したもの（デレバ・デレロバ・デレリャー）もある。

上記のような具体的語形全体の中で最もよく使用する語形については調査時にインフォーマントから確認を取ってある。一つに絞れない場合は二つまでとした。

そこで、先に分類した a～d 各種の中にこの最多使用語形が最低一つ含まれていれば、その型そのものを最多使用型ということで◎とし、その他を○にすることによって二段階の差を付けてみた。インフォーマントによっては時に三段階の回答もあったが統計の時点では二段階で統一した。

すると◎○の組合せが何通りか出来ることになる。最も普通の組合せは例えば〔◎○○○〕に代表されるような場合であるから、これを点数化す

表10 〔一oba 形〕使用率比較表（全体） 単位＝％

地 域	国中	甲 府 市						
		郊外	市 街 地					
語形	年代	A 年代	A 年代	A 年代	B 年代	C 年代	D 年代	E 年代
動詞型活用語	①	39.8	24.8	22.8	20.4	18.1	15.0	14.0
	②	41.7	32.7	18.4	19.6	17.0	13.0	17.8
	③	41.7	28.1	17.6	15.8	14.8	14.0	20.0
	④	41.7	25.0	19.4	17.8	14.8	6.9	17.8
	⑤	37.1	22.5	12.7	12.0	11.5	8.9	17.8
	⑥	37.1	22.3	15.0	13.9	8.6	15.0	17.6
	⑦	38.1	24.0	12.6	11.8	9.4	7.9	13.5
形容詞型活用語	⑧	32.0	19.4	9.9	9.9	2.9	3.0	7.9
	⑨	35.8	21.8	12.6	9.9	5.0	5.0	7.0
	⑩	16.7	16.5	7.8	3.0	2.9	1.0	8.9
	⑪	20.6	18.6	8.7	5.9	5.7	1.0	1.0

る時に◎は 2 点、○は 1 点とすると〔2・1・1・1〕というような総計 5 点の配点になる。これは率を出すにも算出しやすい。

以下の組合せについても総計が 5 点になるように配点すればよいわけであるが、時には〔◎◎◎○〕と〔◎◎――〕というのが出てきてこの場合は止むを得ず総計 6 点とした。

こうして同一年代のものを累計して a～d 型別々に出した総合点を百分率で表したものが「使用率」である。

本稿では a 型の〔一oba 形〕の使用状況の報告が主眼であるので敢えて b・c・d まで示す必要は無いかもしれないが、ここは仮定表現全体の中の位置付けを問題にしているので繁を厭わず提示することにする。

5-4 b 全体的比較

上記のごとき方針に基づいて出した各地域・各年代の仮定表現使用率のうち〔一oba 形〕についてのみ示した比較表が表10である。この表からはおよそ次の様な事が指摘できる。

第一に、A 年代の比較では三地域相互に差が出ていることがわかる。特に国中 A 年代と市街地 A 年代とでは後者の方が半分以下になっている。

使用パターンと保持率とによる比較では国中 A 年代と甲府市郊外 A 年代とではほとんど差が無かったのであるが、この種の尺度によれば、〔一oba 形〕使用の割合が同年代の場合、郡部でよ

り高く都市部に近い程低くなっていることがはっきりと確かめられるわけである。

かつて昭和60・61年に行なった甲府市内とその隣接町村(数島町・竜王町・昭和町・玉穂町・石和町・春日居町・甲府市の北部山間地帯と南部農園地帯を含む)の調査(アンケート方式)では、甲府市内については市街地とその周辺とに二分しないで一様に扱ったのであったが、今回の調査によってそこに層があることがわかった。従って、今後この種の言語調査をする場合には甲府市は二～三層に分けて観察するのが妥当かと思われる。

第二に、市街地を年代別に見ると大局的にはAからDまでは漸減しており、高年層と中年層とで差が出ているが、若年層のE年代では逆に上昇していることが確かめられる。

これらの点は使用パターンと保持率の比較でも同様であった。

少なくともいわば社会人としてのA～D年代までは年代と使用率とはほぼ正比例の関係にある。

E年代は使用パターンの比較では市街地の中年層を上回っていたり、保持率でも部分的ではあるが中年層のC年代に並ぶ値を示していたりであったが、この使用率でもその趨勢は変わらずむしろ部分的には高年層をうわまわるほどである。また、表7によると使用パターンに崩壊寸前のものが少々見られはしたが、これも比較的には中年層の方がむしろ多くD年代では2倍の数に達するほどであった。

こうして二、三の観点から表面に出た限りでは甲府市街地のE年代の「oba形」使用は健在で、その実態は予想を上回るもので注目に直する。

これも社会人になる前の就学中の子供達の言語使用実態の一側面としてとらえることができよう。年寄りや大人たちから日常聞いているものを比較的素直に受け継いでいるということなのかもしれないが、調査の段階で彼らが使用語と理解語とをどの程度区別していたかについては筆者(指導者)が全員に立ち合ったわけではないのでこの結果についてはその点やや不安もないではない。

なお、近隣町村の臨地調査も現在進行中であるからその結果と比較することで客観性が出てくる可能性もあろう。また、これらの中学生が県外に出たり社会人になったりしてからはどう変化するかについても興味をそそられるところである。

第三に、各語形ごとに使用率を見てみると、動詞型活用語と形容詞型活用語とでは各地域及び各年代とも後者の方が使用率が低く、また、両活用語とも自立語よりも付属語の方が使用率が低くなっていることがわかる。

従って、おおよそ全体としては、

動詞→動詞型活用助動詞→

形容詞→形容詞型活用助動詞

という順に使用率が低くなっているということになる。

前述の保持率の比較では、特に市街地の動詞型活用語については動詞に比べて助動詞の方が低いことが確認されており、それは使用率による上記の傾向を結果的に補う内容となっている。

第四章で触れたように関東地方域で山梨県と傾向を同じくする神奈川県相模川西域ではこの点に関してはいかなるものであるか大変興味を持たれるところである。今後の課題の一つである。

なお、保持率では語形①(ソーシロバ)が最も高い値を示したが、この使用率の比較では必ずしもそうとは限らない。また、形容詞ではE年代を除いて全てが⑧(暑ケロバ)よりも⑨(女ラシケロバ)の方がやや高く、この点は保持率による比較の場合と同じ傾向を示している。

5-4c 男女別比較

仮定表現全体の使用率比較表は別添資料1・2に示して置いたが、わかりやすくするために「oba形」使用率の数字だけを取り出したのが表11である。

男女を別にしてそれぞれに全体の傾向を見ると、大勢としてやはり前節(5-4b)で確認した線に沿っていると言える。

次に、各地域・各年代ごとに男女を比較してみると次のようなことが指摘できる。

第一に、A年代では国中全体は男性よりも女性の方が逆に低くなっていることがわかる。

先の保持率による男女比較では国中A年代と甲府市郊外A年代とは形容詞型活用語にややその特徴が見られる程度でその他の語形には全く差がなかったが、使用率にはそれが歴然と現われており、特に国中A年代女性は全体でも最高の使用率を示

表11 〔一oba形〕使用率比較表（男女別）

単位＝％

地 域		国 中		甲 府 市											
				郊 外		市				街				地	
年代 語形		A		A		A		B		C		D		E	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
動詞型活用語	①	37.3	42.3	26.4	23.1	27.8	20.0	21.1	18.9	18.8	16.7	16.4	13.3	18.0	10.0
	②	36.5	47.1	34.0	32.1	27.8	13.4	23.9	11.4	16.9	17.1	9.1	17.8	19.6	16.0
	③	37.3	46.2	28.3	28.0	22.2	15.1	16.7	14.3	12.1	20.0	10.9	17.8	22.0	18.0
	④	39.2	44.2	26.4	23.5	22.2	17.9	16.7	20.0	13.6	17.1	5.4	8.7	13.7	22.0
	⑤	35.8	38.5	25.0	20.0	22.2	7.4	12.3	11.4	12.3	10.3	8.9	8.9	15.7	15.7
	⑥	32.7	41.5	25.0	19.6	20.0	12.3	12.1	17.1	10.6	5.1	14.5	15.6	21.2	21.2
	⑦	34.0	42.3	25.5	22.6	16.7	10.4	10.4	14.3	10.4	7.7	7.3	8.9	17.3	17.3
形容詞型活用語	⑧	26.0	38.0	20.8	18.0	14.3	7.6	9.1	11.4	4.6	0	1.8	4.4	12.0	12.0
	⑨	37.0	34.6	23.5	20.0	20.0	8.8	7.6	14.3	7.7	0	5.5	4.4	12.0	12.0
	⑩	21.2	12.0	17.6	15.4	13.5	4.5	3.1	2.8	4.5	0	0	2.2	10.0	10.0
	⑪	28.8	12.0	17.6	19.6	13.5	6.1	9.1	0	8.9	0	0	2.2	2.0	2.0

していることは注目される。それに比して、甲府市街地A年代女性はその $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{3}$ 以下という大差になっている。

郡部では女性の方が使用率が高くなっているが、むしろこれが農村地帯の自然な姿であるかもしれない。また、男性の保守的傾向や仕事の役割分担の違いなどが逆に都市部の使用率を相対的に高くしているということも考えられる。

第二に、市街地での男女差は年代や語形によってまちまちであることがわかる。

A年代は男性の方が高いことで一貫しているし、C年代も一部を除いてこれに準ずる傾向である。D年代は語形①以外は全て女性の方が高くなっている。B年代は語形によりけりでまちまちである。E年代はほぼ同じ割合である。

5-4 d 仮定表現全体の比較

前節では〔一oba形〕(a型)の使用率だけを取り出して比較してみたわけであるが、ここでは仮定表現全体を見渡した場合どのようなことが言えるのか、先に5-4 aで説明したように全体をa～dの4パターンに分類して使用率の比較をしておきたいと思う。

5-4 aの方針に基づいて算出した全ての使用率は巻末の別添資料1(全体)及び別添資料2(男女別)に示しておいた。また、別添資料3は別添資料1をグラフ化して観察しやすくしたものである。これらを相互に参照しながら各地年代別に眺

めて行くことにする。

まず、國中A年代では語形⑩⑪(言ワナケロバ・言イタケロバ)を除いて他は全て〔一oba形〕(a型)使用率が最も高くc型の共通語形の二倍以上になっている。つまりここではa型の重みがそれだけ大きいとも言えるわけである。

そして、b型(リヤー・キャー型)とc型(レバ型)とは近似した値を示している。

⑩⑪はd型(その他)が最も高い。

男女別に見た場合女性のa型がやや高くなっているが全体としてはほぼ同様のことが言える。

次に、甲府市郊外A年代ではa型が平均20%以下がってほぼc型(レバ型)と並ぶ。そして、a型以外のタイプ、ここではb型(リヤー・キャー型)が使用率のトップを占めるようになっていることに注意したい。

これらは男女別でも同様である。

次に、甲府市街地にはいるとa型は全体に使用率が低くなって一桁または0%というのも見られるようになり、仮定表現全体における〔一oba形〕の役割の重みという点ではやや軽くなって、逆にb・c型といったそれ以外のタイプが主流になっているという事実は否めない。

b型とc型については、A年代では平均してc型がわずかに高くなっている程度であるが、B年代になるとほぼ完全にc型が使用率トップで共通語形主導型の言語生活になっていることが確かめられる。

E年代もa型の使用率が予想を上回る事で注目されたところであるが、仮定表現全体として見ればc型の共通語形が平均50%近くに達しており、特に女性では動詞①～④で50～60%と過半数を占めるまでになっていて、やはり若年層らしく最も共通語化が進んでいる年代だと言える。

女性といえば、甲府市街地ではどの年代も男性より女性の方がこのc型の使用率が高いのも特徴の一つと言えよう。

なお、語形別には特に顕著な傾向は見られないが、甲府市街地では⑩⑪についてはb型の使用率が他に比しては高い値を示しているといったところである。

5-5 まとめ

本章で検討した諸事項をここで整理して置くとおおよそ次の様なことになる。

(a) 使用パターンの比較

- 1) 形容詞型活用語に〔-oba 形〕がどの程度使用されているかによって比較してみると、甲府市郊外も市街地も年代が下るにつれてその使用が次第に少なくなり、逆に形容詞型活用語に〔-oba 形〕を全く使用しないタイプ即ち動詞型活用語のみ又は動詞のみといった使用パターンが増えていく傾向が見られる。
- 2) 甲府市街地では〔-oba 形〕を1～2種類しか使用しない、いわば崩壊寸前のパターンが特に中年層を中心に見られる。その1～2種類の語形は動詞型活用語就中動詞に集中している。
- 3) 甲府市郊外は国中地方(甲府盆地)全体の傾向の方によく似ており、形容詞型活用語に〔-oba 形〕を全く使用しないタイプはほとんどない。

(b) 保持率の比較

- 1) 10人当たり何人が〔-oba 形〕を保持しているかによって見ると、国中地方と甲府郊外とではほぼ全員が使用しているのに対して、市街地では年齢が下るにつれて保持率が悪くなり語によってはその半分以上になっているものもある。E年代はやや高めで予想を上回っている。
- 2) 動詞型活用語よりも形容詞型活用語の方が保持率が低く、特に市街地では顕著な傾向にある。また、動詞型活用語では動詞よりは助動詞の方が低いことがわかる。

- 3) 男女差に顕著な傾向は見られないが、部分的には女性の方が保持率が低くなっているところが目に付く。(A・C年代の⑤～⑩)

(c) 使用率の比較

- 1) 国中地方(郡部)では平均40%と最も高く、甲府市郊外・甲府市街地の順に都市部に近い程使用率が低くなっている事が確認できる。さらに市街地ではA～D年代迄は漸減しているが、E年代は逆にやや増加して高年層に近い値を示している。
- 2) 語形別に見ると、動詞が最も使用率が高く、以下動詞型活用助動詞→形容詞→形容詞型活用助動詞の順に低くなっている事が確かめられる。
- 3) 男女別では郡部の国中地方では女性の方が使用率が高く全体の最高値を示しているのに対して、都市部の甲府市は郊外・市街地共に逆に男性の方が高くなっている。
市街地における男女差は年代によってまちまちである。
- 4) 仮定表現全体の比較ではa型(〔-oba 形〕)主導型になっているのは郡部の国中地方だけで、他は全てb型(リャー・キャー型)又はc型(レバ型・共通語形)が主流になっていて〔-oba 形〕の役割の重みはやや軽くなっている。
- 5) b型とc型とでは、甲府市郊外ではb型が幾分高くc型の台頭を押えている感じであるが、甲府市街地では全体にc型が使用率トップでB年代以降は正に共通語形主導型になっていることが確かめられる。そして、この傾向はどの年代とも女性の方が顕著である。

(1990年1月5日受理)

[引用文献]

- 『関東地方域方言事象分布地図』第二巻 表現法篇 大橋勝男 桜風社(1976)
 - 『東京都言語地図』大島一郎他 東京都教育委員会編 (1986)
 - 『国立市史』上巻 第二編「民族」所収 「国立のこぼ」 樋渡 登 国立市教育委員会編 (1988)
 - 『口語法調査報告書』国語調査委員会編 国書刊行会 (1906)
 - 『講座方言学』5 一関東地方の方言一所収「神奈川県の方言」 日野資純 国書刊行会 (1984)
- (なお、平山輝男編『全国基礎語彙の研究序説』〈明

[illegible]

仮定表現使用率比較表（全体）

仮定表現使用率比較表（全体）

単位＝％

活用の種類			動詞型活用語							形容詞型活用語			
			① ス ル	② ク ル	③ ミ ル	④ ア ケ ル	⑤ セ ル	⑥ レ ル	⑦ ラ レ ル	⑧ ア ツ イ	⑨ オ ソ ナ イ	⑩ ナ イ	⑪ タ イ
国 中	A 年 代	a	39.8	41.7	41.7	41.7	37.1	37.1	38.1	32.0	35.8	16.7	20.6
		b	20.4	18.4	19.4	19.4	24.8	24.8	22.9	24.0	25.5	25.5	27.4
		c	20.4	20.4	19.4	19.4	19.0	19.0	19.0	19.0	19.8	18.6	20.6
		d	19.4	19.4	19.4	19.4	19.0	19.0	20.0	25.0	18.9	39.2	31.4
甲 府 郊 外	A 年 代	a	24.8	32.7	28.1	25.0	22.5	22.3	24.0	19.4	21.8	16.5	18.6
		b	31.4	27.3	28.1	32.7	36.3	37.9	34.6	36.9	36.6	34.0	35.3
		c	24.8	21.8	23.3	23.1	21.6	19.4	19.2	23.3	22.8	20.4	23.5
		d	19.0	18.2	20.4	19.2	19.6	20.4	22.1	20.4	18.8	29.1	22.5
甲 府 市 街 地	A 年 代	a	22.8	18.4	17.6	19.4	12.7	15.0	12.6	9.9	12.6	7.8	8.7
		b	24.7	30.1	26.5	27.2	33.3	26.0	22.3	33.7	32.0	45.6	45.6
		c	32.7	32.0	36.3	34.0	34.3	39.0	34.0	35.6	35.9	23.3	26.2
		d	19.8	19.4	19.6	19.4	19.6	20.0	31.1	20.8	19.4	23.3	19.4
	B 年 代	a	20.4	19.6	15.8	17.8	12.0	13.9	11.8	9.9	9.9	3.0	5.9
		b	25.2	22.5	26.7	27.7	32.0	31.7	30.4	33.7	27.7	40.0	35.6
		c	35.0	38.2	37.6	34.7	36.0	34.6	35.3	36.6	42.6	36.0	37.6
		d	19.4	19.6	19.8	19.8	20.0	19.8	22.5	19.8	19.8	21.0	20.8

活用の種類			動詞型活用語							形容詞型活用語			
			① ス ル	② ク ル	③ ミ ル	④ ア ケ ル	⑤ セ ル	⑥ レ ル	⑦ ラ レ ル	⑧ ア ツ イ	⑨ オ ソ ナ イ	⑩ ナ イ	⑪ タ イ
甲 府 市 街 地	C 年 代	a	18.1	17.0	14.8	14.8	11.5	8.6	9.4	2.9	5.0	2.9	5.7
		b	25.7	25.0	23.8	26.7	25.0	27.6	25.5	35.6	31.0	41.9	36.8
		c	34.3	34.0	38.6	35.6	44.2	41.9	39.6	34.6	37.0	33.3	35.8
		d	21.9	24.0	22.8	22.8	19.2	21.9	25.5	26.9	27.0	21.9	21.7
甲 府 市 街 地	D 年 代	a	15.0	13.0	14.0	6.9	8.9	15.0	7.9	3.0	5.0	1.0	1.0
		b	22.0	25.0	22.0	29.7	31.7	30.0	30.7	33.0	30.0	46.0	41.0
		c	43.0	42.0	44.0	43.6	39.6	35.0	29.7	40.0	37.0	33.0	36.0
		d	20.0	20.0	20.0	19.8	19.8	20.0	31.7	24.0	28.0	20.0	22.0
甲 府 市 街 地	E 年 代	a	14.0	17.8	20.0	17.8	17.8	17.6	13.5	7.9	7.0	8.9	1.0
		b	21.0	14.9	14.0	13.9	19.8	17.6	17.3	14.9	22.0	36.6	35.6
		c	45.0	47.5	46.0	48.5	42.6	45.1	35.6	49.5	51.1	33.7	41.6
		d	20.0	19.8	20.0	19.8	19.8	19.6	33.6	27.7	20.0	20.8	21.8

別添資料 2

仮定表現使用率比較表（男女別）

単位＝％

活用の種類			動 詞 型 活 用 語							形容詞型活用語			
			① ス ル	② ク ル	③ ミ ル	④ ア ケ ル	⑤ セ ル	⑥ レ ル	⑦ ラ レ ル	⑧ ア ツ イ	⑨ オ ッ ナ イ	⑩ ナ イ	⑪ タ イ
地 域	年 代	語 型											
国	A 年 代 男	a	37.3	36.5	37.3	39.2	35.8	32.7	34.0	26.0	37.0	21.2	28.8
		b	23.5	23.1	23.5	21.6	26.4	28.8	26.4	28.0	25.9	25.0	26.9
		c	19.6	21.2	19.6	19.6	18.9	19.2	18.9	18.0	18.5	17.3	19.2
		d	19.6	19.2	19.6	19.6	18.9	19.2	20.7	28.0	18.5	36.5	25.0
中	＃ 女	a	42.3	47.1	46.2	44.2	38.5	41.5	42.3	38.0	34.6	12.0	12.0
		b	17.3	13.7	15.4	17.3	23.1	20.7	19.2	20.0	25.0	26.0	28.0
		c	21.2	19.6	19.2	19.2	19.2	18.9	19.2	20.0	21.2	20.0	22.0
		d	19.2	19.6	19.2	19.2	19.2	18.9	19.2	22.0	19.2	42.0	38.0
甲 府	A 年 代 男	a	26.4	34.0	28.3	26.4	25.0	25.0	25.5	20.8	23.5	17.6	17.6
		b	30.2	27.8	30.2	32.1	32.7	36.6	33.3	35.8	33.3	31.4	35.3
		c	24.5	20.7	22.6	22.6	23.1	19.2	19.6	22.6	23.5	19.6	23.5
		d	18.9	18.5	18.9	18.9	19.2	19.2	21.6	20.8	19.2	31.4	23.5
郊 外	＃ 女	a	23.1	32.1	28.0	23.5	20.0	19.6	22.6	18.0	20.0	15.4	19.6
		b	32.7	26.8	26.0	33.4	40.0	39.2	35.8	38.0	40.0	36.5	35.3
		c	25.0	23.2	24.0	23.5	20.0	19.6	18.9	24.0	22.0	21.2	23.5
		d	19.2	17.9	22.0	19.6	20.0	21.6	22.6	20.0	18.0	26.9	21.6

仮定表現使用率比較表（男女別）

活用の種類			動 詞 型 活 用 語							形容詞型活用語				
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	
			ス ル	ク ル	ミ ル	ア ケ ル	セ ル	レ ル	ラ レ ル	ア ツ イ	オ ッ ナ イ	ナ イ	タ イ	
地 域	年 代	語 型												
甲	A 年 代 男	a	27.8	27.8	22.2	22.2	22.2	20.0	16.7	14.3	20.0	13.5	13.5	
		b	27.8	33.3	25.0	30.6	30.6	31.4	25.0	37.1	31.4	40.5	32.4	
		c	25.0	19.4	33.3	27.8	27.8	28.6	22.2	28.6	28.6	21.6	35.1	
		d	19.4	19.4	19.4	19.4	19.4	20.0	36.1	20.0	20.0	24.3	18.9	
府	＃	a	20.0	13.4	15.1	17.9	7.4	12.3	10.4	7.6	8.8	4.5	6.1	
		b	23.1	28.4	27.3	25.4	33.8	23.1	20.9	31.8	32.4	48.5	53.0	
		c	36.9	38.8	37.9	37.3	36.8	44.6	40.3	39.4	39.7	24.2	21.2	
		d	20.0	19.4	19.7	19.4	19.1	20.0	28.4	21.2	19.1	22.7	19.7	
市	B 年 代 男	a	21.1	23.9	16.7	16.7	12.3	12.1	10.4	9.1	7.6	3.1	9.1	
		b	25.8	20.9	33.3	33.3	33.8	33.3	31.3	36.4	31.8	47.7	39.4	
		c	33.3	35.8	33.3	30.3	33.8	34.8	34.3	34.8	40.9	29.2	31.8	
		d	19.7	19.4	19.7	19.7	20.0	19.7	23.9	19.7	19.7	20.0	19.7	
地	＃	a	18.9	11.4	14.3	20.0	11.4	17.1	14.3	11.4	14.3	2.8	0	
		b	24.3	25.7	20.0	17.1	28.6	28.6	28.6	28.6	20.0	27.8	28.6	
		c	37.8	42.9	45.7	42.9	40.0	34.3	37.1	40.0	45.7	47.2	48.6	
		d	18.9	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	22.2	22.8	

仮定表現使用率比較表（男女別）

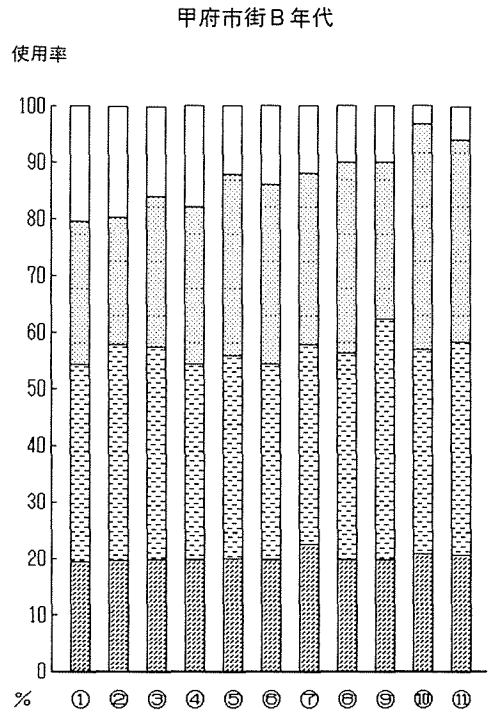
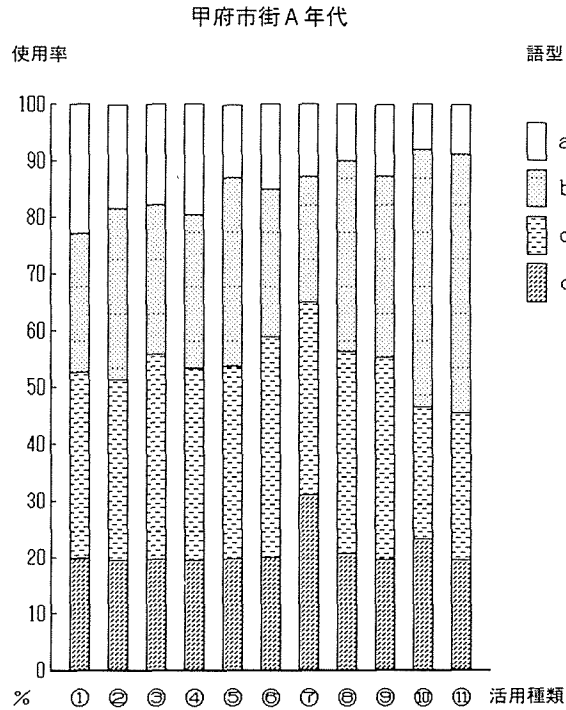
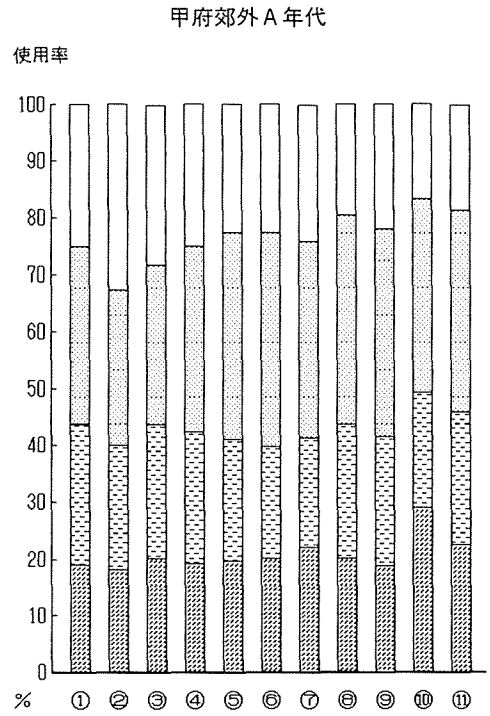
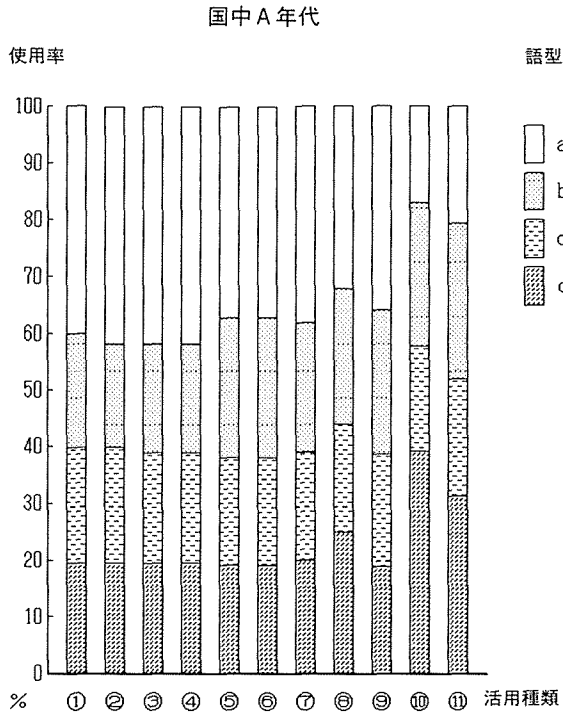
仮定表現使用率比較表（男女別）

単位＝％

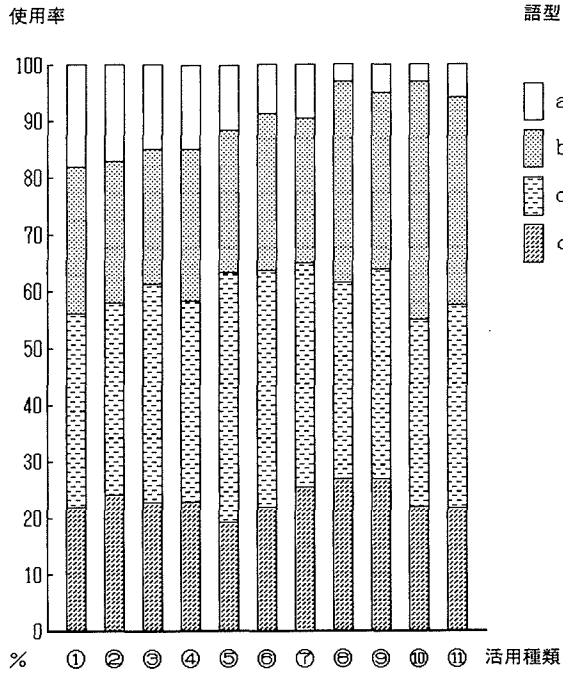
活用の種類			動 詞 型 活 用 語							形容詞型活用語			
			① ス ル	② ク ル	③ ミ ル	④ ア ケ ル	⑤ セ ル	⑥ レ ル	⑦ ラ レ ル	⑧ ア ツ イ	⑨ オ ソ ナ イ	⑩ ナ イ	⑪ タ イ
甲	年 代 男	C a	18.8	16.9	12.1	13.6	12.3	10.6	10.4	4.6	7.7	4.5	8.9
		b	29.0	29.2	28.8	33.3	33.8	36.4	32.8	38.5	36.9	43.9	41.8
		c	33.3	33.8	39.4	33.3	33.8	33.3	26.9	32.3	30.8	28.8	29.9
		d	18.8	20.0	19.7	19.7	20.0	19.7	29.9	24.6	24.6	22.7	19.4
府	女	a	16.7	17.1	20.0	17.1	10.3	5.1	7.7	0	0	0	0
		b	19.4	17.1	14.3	14.3	10.3	12.8	12.8	30.8	20.0	38.5	28.2
		c	36.1	34.3	37.1	40.0	61.5	56.4	61.5	38.4	48.6	41.0	46.2
		d	27.8	31.4	28.6	28.6	17.9	25.6	17.9	30.8	31.4	20.5	25.6
市	年 代 男	D a	16.4	9.1	10.9	5.4	8.9	14.5	7.3	1.8	5.5	0	0
		b	21.8	34.5	29.1	38.2	37.5	36.4	40.0	1.8	34.5	54.5	50.9
		c	41.8	36.4	40.0	36.4	33.9	29.1	25.4	40.0	25.5	25.5	29.1
		d	20.0	20.0	20.0	20.0	19.6	20.0	27.3	20.0	34.5	20.0	20.0
地	女	a	13.3	17.8	17.8	8.7	8.9	15.6	8.9	4.4	4.4	2.2	2.2
		b	22.2	13.3	13.3	19.5	24.4	22.2	20.0	26.7	24.4	35.5	28.9
		c	44.4	48.9	48.9	20.0	46.7	42.2	33.3	40.0	51.1	42.2	44.4
		d	20.0	20.0	20.0	19.5	20.0	20.0	37.8	28.9	20.0	20.0	24.4

活用の種類			動 詞 型 活 用 語							形容詞型活用語			
			① ス ル	② ク ル	③ ミ ル	④ ア ケ ル	⑤ セ ル	⑥ レ ル	⑦ ラ レ ル	⑧ ア ツ イ	⑨ オ ソ ナ イ	⑩ ナ イ	⑪ タ イ
甲	年 代 男	E a	18.0	19.6	22.0	13.7	15.7	21.2	17.3	12.0	12.0	10.0	2.0
		b	32.0	21.6	18.0	21.6	31.4	26.9	25.0	22.0	32.0	42.0	43.1
		c	32.0	39.2	40.0	45.1	33.3	36.7	26.9	42.0	36.0	28.0	31.4
		d	20.0	19.6	20.0	19.6	19.6	19.2	30.8	14.0	20.0	20.0	23.5
府	女	a	10.0	16.0	18.0	22.0	15.7	21.2	17.3	12.0	12.0	10.0	2.0
		b	10.0	8.0	10.0	6.0	31.4	26.9	25.0	22.0	32.0	42.0	43.1
		c	60.0	56.0	52.0	52.0	33.3	36.7	26.9	42.0	36.0	28.0	31.4
		d	20.0	20.0	20.0	20.0	19.6	19.2	30.8	14.0	20.0	20.0	23.5

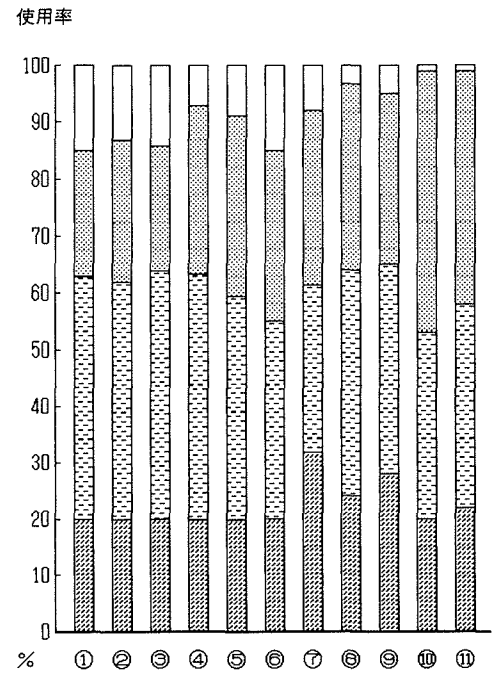
別添資料3



甲府市街C年代



甲府市街D年代



甲府市街E年代

